

自評論争覚え書き（一）

——宮崎三昧「吾亡妻」とその周辺——

池田一彦

緑雨の『国会』時代の批評を中心とした文筆活動において「荆鞭」は二重の意味で注目すべきだと思われる。一つはそれが以後の「国会」紙上での批評活動の方向を決定したと見られる点において、また一つにはそれがやがて鷗外とのいわゆる自評論争を惹き起こすきっかけとなつた点においてである。特に自評論争は緑

雨の数ある論争史上において特筆すべき意義を有するが、これについて從来本格的な検討はなされていない。そこで今回は、論争に直接かかわりのある「荆鞭」の[2]「『吾亡妻』は偽物なり」に的を絞つてその執筆に至る背景を見定め、その上で自評論争の再検討を試みることにする。本稿ではその前半を扱う。

——
明治二十四年八月三日発児の『国民之友』第百二十六号は、そ

の広告欄の一頁分を、十日後発児予定の次号に添えるべき「国民之友夏期大付録」のために割いた。もはや恒例となつていたこの付録の、今回の出し物・作者は左の如くで、それぞれ作者自らによる簡単な広告文が付されている。^{注1}

吾亡妻 宮崎三昧

風流悟 雷音洞主

未定（著述若くは翻訳） 思軒居士

疊天（小説） 抱一庵主人

空屋（小説） 西邱隠者

そして、ここで問題となる三昧が自らの「吾亡妻」に寄せた広告文は次のようであった。

これを愚痴の積聚と嘲られんか將た眞情の結晶と称へられんか予は唯触感の有の儘を打出して毫も偽り飾ることなきなり

素より小説にあらざるを請て小説付録に掲ぐるは「亡妻」を世間に
許多の有情才子淑女に紹介せんが為なりこれを諸名士が錦繡
の腸より出たる小説に間ふる明に其不倫なるを知る花壇に縋
る雀爪頬に諸彦の余光を藉りて大方の一顧を得ば青苔の下佳
城の中燐然として多榮を謝する者あらん

「触感の有の儘」を叙した「小説にあらざる」ものであること、
よつて「毫も偽り飾ることなき」ものであることを三昧自ら記し
ていることは、もともとこれが広告文であるとはいえ重要である
う。「亡妻」を世間に「紹介せんが為」と、その目的を明言して
いるのも見逃せない。ところで、この三昧の「吾亡妻」が早く七
月中旬頃迄には既に書き上げられていて、思軒がそれを自作執筆
以前に一読したことを、同じ思軒の自作広告文によって知ること
ができる。思軒は自作について（標題を）「未定」としつつも、
広告文には、

一昨日俄かに夏期付録に一篇を寄せんことを約す其午後三昧
氏の吾亡妻を読み其真率に感じ今日又た抱一庵氏の曇天の中
の第一章を観て其精練に服す我をして益す技癒を覚えしむ七月
第三日曜日夕大森の井上氏寓にて海水に一浴して了れる時
と記しているのだ。「七月の第三日曜日」は、十九日に当たる。
この後見ることになる徳富蘇峰の三昧宛書簡の文面と考え方させ

るに、「吾亡妻」は少なくとも七月十七日以前に書き上げられて
おり、（「吾亡妻」本文によれば、六月二十三日以降、七月「中元」
の前、ということになろうが）、その後『国民之友』夏期付録に
執筆の約をなした思軒が先ず一読、同誌編集の任にあたった蘇峰
がやはり送られた原稿を読んで感銘を受けたものと思われる。活
字以前に「吾亡妻」を讀んでいる思軒が「其真率に感じ」たと述
べ、蘇峰が「至情の文」と言つてゐる点に、「吾亡妻」の最も早
い時点での受容のされ方の一班が窺えよう。更にいえば、それは
おそらく三昧が讀者に期待したそれでもあつたと思われる。

さて、かくして「吾亡妻」以下しめて五篇の付録が「藻塩草」
欄に添えられた『国民之友』第百二十七号の発兌となる。発行日
は、予告にも、この号の日付にも「八月十三日」とあるが、抱一
庵主人の「宮崎三昧」「吾亡妻」（後出）文中には八月の十二日に
『國民之友』を購求し読過した由見えてるので、実際には一両
日早い出版だったようだ。

「吾亡妻」はその題名の示す如くに、宮崎三昧がその妻照子の病
死を悼んで綴つた亡妻哀悼の文章である。小説ではないのであら
筋紹介というわけには行かないが、引用をおりませつつその内容
の凡そを記したい。

先ず、「藻塩草」全六十頁中九頁を占める「吾亡妻」の冒頭だが、次のようなものであった。

明治廿四年六月二十二日予は吾亡妻わがなきつまを紀するの不幸に遭へり亡妻名は照子渡辺氏よし二十一歳にして予に帰ぎ翌年児侃わんを生む侃が三歳になりし秋家挙りて浪花に遊び居ること三年にして去歳十月根岸に帰りぬ棲を共にすること通じて七年今茲二月廿五日肝臓炎に罹り三月下旬に至りて咯痰烈しく症変じて肺結核病となり（中略）六月に至り衰弱転た甚しく遂に二十二日の払暁まだ夜深きに山の端に傾ふく月の光をたよりて照子は只独り悲しき旅へ啓かしまだら行し予は遺されて鰥夫やもをとなり侃は棄てられて孤兒かなごとなりぬ

この後「一日を越えて谷中村金嶺寺に仏葬の式を行」つたこと、またその悲しみを説き、

嗚呼誰か泣かぬを男子とは定めし漣如たる泣涕のみ豈独り悲歎の符号ならんや謳浪笑教もまた時として寸断の悲腸より出づるもの

という、後に緑雨が引用し、鷗外の側でも（更にその緑雨への）反証の例として挙げることになった一文を付している。

照子が肺結核と病症を変じた時、診察した医師は皆「病治すべからず」と死の宣告をしたのであったが、「予は医師と謀りて萱

氏に口止め又親戚婢女をも固く諱めて此事を照子に知らしめ」ぬようはからつた。

予は其咯痰の較少なく其痛苦の較薄き日渠が莞然怡然として伝ふに堪へざりし嗚呼予は死に至るまでわが妻を欺けりさらながらこれによりて照子は安穩の眠を得たり

以下、三昧は照子と自分、また照子には姑に当たる自分の母（原文中には「萱氏」）、そして一子侃等にまつわるいくつかのエピソードを叙しているが、右の「予は死に至るまでわが妻を欺けり」の句は、その都度形を多少変えながらも通篇三度にわたって繰り返し用いられている。緑雨が「荆鞭」で、これを逆手にとって三昧を攻撃したのは、やはりいい目のつけ所だったと評しうる。

さて、照子逝去のありさまに続いてしばらくは、亡き照子に関する伝記的記事が綴られる。照子の母もまた短命であつたこと、照子が彼の家庭にとつていかに掛け替えの無い存在であったなどを述べて、その賢妻ぶりをつぶさに披露していく。

結婚当時、「月の収入十五金」という「窮乏頗る甚し」い家計を辛苦經營した照子。侃の誕生後、自分が「無聊に堪へず書を著し以て名声を江湖に騒せんと欲し叙事文範を作」つて出版しよう

と思い、書肆を回ったが徒労に終わった際も、照子が「子が名声の世に知られざるが故なり」と励まし、「嚴に家計を節し」て積んでおいてくれた金のために上巻をどうにか世に出せたことも思い出される。今にして思えば著書の売れ行きなど「唯広告の金を吝まざると名家の玄関に拝するを懶しとせざる」といった「秘訣」に全く左右されるのだが、当時やはり売れ行きよろしからずして、「予大に焦躁し且つ照子に愧」じた際は、既にその理をさとていたと覚しく、「これ子が罪にあらず資薄くして新聞廣告の足らざるが故なり時に投ぜざるが故なり售れずとて深くな憂ひ給ひそらく售れずとも天下豈一二の知」なからんや」と激励してくれた。

照子こそ「実に予が唯一の知己」であったのだ。のみならず、照子は献身的に、自己犠牲的に「良人」たる自分のために生きた。「照子は常にみづから其身は窘しめて予を社会に著名ならしむる事に勤め」たのである。

嗚呼予が今日担へるところの半身の名誉は実に照子の有なりといふべし（中略）嗚呼鄙名やゝ同人の間に知られ幸に天下の諸名士と文壇の上に追随周旋することを得るの今日予が当初唯一の知己は早く已に予を棄てゝ去ぬ

といった詠嘆のあとは、照子の「其身に奉すること極めて僕」であつたことはじめ、その言動・趣味等を思い出とともに記していく

き、この報われぬ「賢婦」を顕賞している。

中元将に近づかんとす侃茄子を剪りて馬となし爪を摘みて牛となし謡ふて以てこれを牽く何の為めにするぞと問へば曰く以てかあちゃんを迎ふるなりと予為に悽然たり嗚呼独り侃のみならざるなり予もまた此盂蘭盆会には世俗の習に従ひて茄子の馬瓜の牛を作り以て照子の靈を迎へんと思ふなり嗚呼これ何等の狂愚ぞや（中略）子は母に後れて慧児となり父は妻を喪ひて愚人となれり

この部分は、書簡で蘇峰が「『中元将に近づかんとす』の一節に至りては巻を掩ふて覚えず泫然」と言い、書評で抱一庵がここに至つて「余は最早読むに得堪へず巻を掩ふに了れり」と述べている箇所だ。

葬式は、「梅天」とはいえ、この時ばかりは「冥天汝が為に積雲を開」いており、「大率皆當世の名士文界の明星然らざれば汝が平生親近せる清潔にして且つ真摯なる甲乙」の参会するを得た。終わり近く、三昧は、

汝の再び蘇生せざることは予もまた明にこれを知れり明に知て尚且つ耿々として懷に忘られず常に汝の再び我傍に来ることなきかを疑ふものは痴愚の然らしむるか將た人の至情なるか予は痴愚と至情と二物ならざるを信ずるなり

と述べている。文中、「至情」の語は、この後の「『吾亡妻』の末に書す」、「偶筆」という一連の三昧による「自評」的文章にも見られるものであり、緑雨も拘わりを見せるものであることをここで注意しておこう。

ところで、本文の方は、最後に照子臨終の様子を書き記して、次のような照子の靈への呼びかけで結んでいる。

顧ふに予が齡今茲三十萱氏六旬に三を加ふ侃劣に六歳侃也再び母なるべからず萱氏再び婦なるべからず予再び室なかるべからず照子靈あらば頼に來りて繼室の人によれ

実にこの最後部こそは、多くの論者によつて（『読売』のみやび、緑雨のみならず論敵鷗外にも）本文章中唯一の瑕瑾とされた箇所であり、本文章が「求婚廣告」との皮肉を投げかけられたのもこの箇所ゆえであった。^{注2}

二

さて、以上「吾亡妻」の全体を見わたして來たわけだが、先にも触れたようにこの「吾亡妻」を載せた『国民之友』は、その印刷された発行年月日よりも少なくとも一日は早く発兌されている模様である。つまり、八月十二日には既に売られていたと思われる。そして、おそらくその『国民之友』第百二十七号発兌に当て

込んで、三昧は十二日の『東京朝日新聞』に「『吾亡妻』の末に書す」なる一文を寄せた。緑雨が「荆鞭」の〔〕で三昧批判の根拠とした「偶筆（国民之友付録を読む）其一」（同紙、八月十八日、筆名「虚子」）より早い、これもやはり三昧の「吾亡妻」に対する一種の「自評」と言えるものであった。（否、むしろこちらの方こそ「自評」の名にふさわしいものであった。）先に名のみ引き合ひに出した徳富蘇峰の、「吾亡妻」を読んでの感想を記した三昧宛書簡もそのまま引かれている。少々長いが全文引用する。

『吾亡妻』の末に書す

三昧

若し情の真は愚に在りと言ふことを得べくば予が『吾亡妻』の情は實に真なり若し文の妙は拙に在りと言ふことを得べくば予が『吾亡妻』の文は實に妙なり知らず『吾亡妻』の国民之友氏に紹介せられて天下公衆に見えん日涙を以て『吾亡妻』を迎へんものそれ幾何人がある想ふに読者の大半は筆の拙を議することの愚を哂ふや疑なし然れども予が涙と血とは洒いで此一篇の中に在り

予少時人の嘖々として韓愈が祭十二郎文を称するを聞き予も亦沈德潛が唐宋八大家文を披いて其妙味を咀嚼せんと努めたり然れども當時不幸にして予が眼は祭十二郎文の紙背に透徹すること能はず多少の妙を感得せざるにあらざりしといへど

も竟に鰐魚文の崢嶸磊落喜ぶべきに及ばずとせり尚盍ぞ幾滴

々の涙を祭十二郎文の上に濺がんや爾來韓文を手にせざること
と數年頃者「吾亡妻」を草して之を國民之友に載せんことを
徳富君蘇峰に謀るに及び君祭十二郎文を称して至情より發せる
文の崇重すべきを説かる予洒然復た韓文を把て祭十二郎文を
誦するに我何の故たるを知らず哽咽して終に卒読に堪ざるを

覚えぬ嗚呼予先人の恵に頼り短髪未だ理せざるに早く既に書
を誦することを知り爾來文を闇せしこと幾十百篇書を繙きし

こと幾百千巻、慚愧す平生他人が紅涙を洒ぎし文を等閑に読
過せしことそれ幾何ぞ他人が腔血を絞りし物語を平々に看過
せしことそれ幾何ぞ予は予が「吾亡妻」を草して情の至切に
して文の至拙なりしによりて予が既往の罪孽を知れり

「吾亡妻」を國民之友に寄せし時徳富蘇峰君より贈ら
れし書翰

本日午後近郷旅行より帰社仕り早速尊文を一読せり今亦再読

せり

至情に発する文字自から人をして多読に堪へざらしむ

生、平生自から鉄石の心腸を誓ふ尊文を誦するに至りて黯然
亦た惻々然、人に向て語る可らざる、我自ら何の故たるを知
る能はざる無窮の感、中より来る生は兀然編輯案に対して黙

坐するのみ

尊文を得て令愛亦不朽なる可し生は令愛の言行に接して同情
の感一層激切なりしと共に博雅真摯なる良人の為にその言行
を不朽にしたるを祝す（祝の字不穩當に似たれども）

全篇皆な真情流露特に「中元將に近づかんとす」の一節に至
りては巻を掩ふて覚えず泫然

生は夏期付録に於て斯る至情の文を博載し天下に紹介するの
榮を得たるを謝す頓首

二十四年七月廿夜午後七時 猪一郎

（原文総ルビ）

「至情」とか「紅涙」とか、この後の「偶筆」とかかわりのあり
そうな語の見られるのとともに、ここでは三昧自身の文に見られ
るその個性的な修辞法（筆法と言つてもよいし、露伴流に「文法」
という言葉を用いてもいいだろう）に注目すべきであろう。後に
雷音洞主こと露伴が、また正太夫こと綠雨が咎め立てしていく、
「偶筆」文の修辞法と一脈相通するものがある。本論争にかかわ
った全ての人々、綠雨も鷗外も漣も（直接かかわったというのでは
ない福泉みやびや露伴、抱庵はもちろん）誰一人として本文章
には触れていないが（触れる者があれば、おのずと論争の様相も
変わつてござるを得なかつたろうが）、これはむしろ不思議なく

らいである。

初めの部分、「愚」とい「拙」といいつつも結局は自ら心血・涙珠を濺いだ「真」あり「妙」ある一文ということに落ち着く調子・按配が、どうやら三昧の「吾亡妻」に関する文章について見る限り一貫していると言えそうだ。特に後出の「偶筆」文と似通つて感じられるのは、蘇峰の評言に言及して自らの文を暗に「至情より発せる文」と称している風にくみ取られるところの、また、「吾亡妻」と同じ死者に対する哀痛の情を述べた古典的名文・韓愈の「祭十二郎文」(但し、これは妻でなく兄の子の死を哀悼した文章である)への評に借りて「吾亡妻」の価値を幾分でも重からしめんとしていると推されるところの筆法だ。それは、そのまま抱一庵の評言に言及して自らの文を率先して「至情の文」と称し、雷音洞主の「風流悟」への評に借りて、「吾亡妻」の文章的価値を大ならしめんとした「偶筆」の修辞法へと繋っていくと言えるだろう。もちろん「偶筆」ほど露わに自作「吾亡妻」を持ち上げようとの意識が見え透くわけではないというのも事実で、そのために右のような見方は大分論争ないし緑雨の非難に引きずられたものと言えなくもないかも知れない。だが、わざわざ自分の一文に添えて蘇峰の書簡を持って来ていることを考え合わせると、「偶筆」文とこの「『吾亡妻』の末に書

す」はさほど遠いものではないかと思われる。そして、その上で両者の決定的な相違を求めれば、それはやはり記名と匿名の差であり、正面からの評言とそうでないものとの差であろうが、ここでは先ずほぼ同内容・同筆法の文章を矢継ぎ早に世に出していく、そして遂には敢えて匿名を使用してくる三昧を確認しておきたい。ここには明らかに、この「吾亡妻」に賭けようとする三昧の意気込みが看取できる。^{注3}

ただ、しかし「吾亡妻」自体がはたしてそのような意気込みを以て遇される体の著作であったのかどうか、三昧自記の広告文とも照らして、そこにも問題は存する。

さて、「吾亡妻」に対する、「国民之友」発刊後の最も早い評の一つと目される抱一庵主人の「宮崎三昧『吾亡妻』」は「郵便報知新聞」八月十五日の第一面に載った。文中には八月十二日に記した由見える。

抱一庵文は先ず冒頭、二十日ばかり前に植村正久が抱一庵に語つたという「余は今は深く宮崎三昧君を臆^{おく}ひ起さす又其の母公をも臆ひ起さす念ひ臆ふて懷に忘るゝ能はざるは三昧君の令閨照子君なり往年余の下谷の寓は恰かも宮崎君の寓と相隣せり」云々の文言の紹介から始まる。次いで、抱一庵の姪をその「婚嫁の前暫らく他家に

行きて行儀を学ばしめんと欲」して露伴に相談したところ、露伴が

待つべきなり。

「惜むべし、宮崎照子の君だに世にありせば」と嘆じたというエピソード、また照子葬儀の際病いに臥していたため姪を代りに行かせたところ、三日後遇った石橋忍月が「御身は何故に葬儀に会せざりしか」と抱一庵の非礼を叱責したというエピソードを挙げ、

ア、淑穆しゆくぼく照子君の如きは以て婦女の鑑とするに足る其の伝記

の如き何人の手に成るとも固より以て人を動かすべし而して

「吾亡妻」一篇是れ其の良人の手に成るもの観念尚雅運筆縦横文字豊富なる明治有数作家の手に成るもの字々熱字々血字々涙固よりまさに怪むなきなり女學雑誌記者宜しく一本を贋写して天下の子女に示して可なり

と照子の伝記、夫三昧の手に成る「吾亡妻」を絶賛している。

この後『國民之友』を都に出て求め、帰途照子の墓に詣でて、夜一時村舎に戻って「吾亡妻」一篇を繙読したことが記されてい
るが、「読んで一行を進むれば我か胸一寸圧窄さるゝが如く涕涙潜々拭ふに遑ま」なかつたとして、特に後半の「中元將に近づかんとす」以下の一文を引く。

心緒乱るゝの折文の脈路を繹ぬべからず文の条理を究むべか

らず「吾亡妻」の文品を味ふは正さに心平らかに体佚き時を

八月十二日夜半王子の村舎に瀑声を耳にしつゝ乱塗す、「雜說」「風流悟」「空屋」「曇天」の諸編は明黎明を待ち几を淨ふて徐ろに繙とき読まむ

と結んでいるが、文中「乱塗」の二字は、初め南翠や抱一庵と等しく「吾亡妻」に好意的な眼差しを向けていた頃の綠雨が、「吾亡妻」に対して「猶ほ恭虔の意を欠くものなきにあらざるかを疑」つたと「荆鞭」で注したものである。抱一庵はなかば常套的に自身の文の纏まらないのを謝する意でもつて「乱塗」の二字を用いたのだろうが、それが「吾亡妻」の評文であつてみれば当の「吾亡妻」へも自然「乱塗」の意義は及ぶ筈であるから、綠雨の疑惑はそうした見地から発したものであつたろう。

かくして宮崎三昧の「吾亡妻」は、早く活字になる以前より森田思軒・徳富蘇峰らの称賛を受け、また『國民之友』付録として世に出るやまもなく原抱一庵・須藤南翠注4等々の絶賛を浴びたわけ
で、先ずは自ら「『吾亡妻』の末に書す」の如き文章を「吾亡妻」の世人に見まわえるとほぼ時を同じくして公けにした三昧にとって、満足のいく評判をかち取つたものと言いうる。

だが、その評判もまだ狭い文学者仲間のものに止っていた。世

評というにはまだ至らない。三昧は、あたかもこの好評に拍車をかけるかのように自ら「吾亡妻」称讃の意のこもった一文を作つて十八日の『東京朝日新聞』に掲げた。直接縁雨の「荆鞭」と、ひいては自評論争とかかわつてくる、これが「虚子」なる匿名を用いて三昧の著わした「偶筆」であつた。

三

先ず、何はともあれ「偶筆」の全文を左に引用する。論述の便宜上、内容的に大きく二つに分けて、前半（三昧の「吾亡妻」）への自評的？（言及部分）をA、後半（三昧の「風流悟」評部分）をBとする。

●偶筆 《国民之友付録を読む》

其一 虚子

A 天心、露伴、太華、篁村、三昧の諸君に誘はれて香魚を熊谷の河に漁し暢遊二日夜、旗店小婢刃舌諸文学名家を歴碩するに敗興し、昨倉皇夜を侵て帰りぬ是を以て未だ国民之友夏期付録を見ざりしなり今早起苦茶一盞夜來の疲憊拭去し郵筒中の新聞紙を把てこれを閲す偶々報知新聞に於て原君抱一庵が逸早くも三昧道人の「吾亡妻」に就て感を書したる文を読み欣然として君の誠ある涙珠が至情の文の為に堕ちたるを喜

び卒に復た黄耳が耳辺を捜つて国民之友を読み『吾亡妻』より読みて雷音洞主の風流悟に及び瀏覽一過、巻を翻して復た首より之を誦し誦し畢りて又其下半篇を復し終に憮然として巻を抛うち之を少焉して喟然として歎じまた少焉して惻然として泣きぬ

風流悟は何ぞ其れ悲しきや予が胸は戚々焉として為に疼み予が涙は冷々乎として為に墮ちたり紅色に看入りて而後に黄なり白なる者を見る時は黄なり白なる者亦卒に紅し顧ふに予が涙の風流悟に墮ちし所以の者は予が眼の『吾亡妻』に紅化せられしが為にはあらざるか否々別におのづから予が中懷に接觸する所のものあればなり予が感を拈起するものあればなり

B

予は明かに作者が實に風流悟中の人たるを認めんとす如何となれば予も亦実に曾て風流悟中の人たりしことあればなり予は曾て作者の説くところの如く詐偽暴力妖術毒薬等の存在して勢を逞くせる俗世界より抽出されて恋と名のついたる牢獄に投ぜられたり予は世の所謂恋の成就を冀望して成就せざるを悲しみ且つ恨み歎せり是等の行徑毫も作者の説くところと差違なかりし然れども予が無似なる予が罪業の至重なる作者の説くが如き世人が見て成らずとなせるところの恋を成して

それにて満足すること能はずそれに安心すること能はず今
も尚ほ恋の牢獄の裏にあつて（寧ろ阿毘焦熱の中にあつて）
生甲斐もなく生活しつゝあれど作者の説くが如く牢獄即樂園
の觀をなすこと能はず俗に所謂恋の成就といふものを曾て一

たび欲望したるを冷汗を流して恥ぢ且つ一直線に疾走して眞
の恋の成就の方に足ること能はず世俗の所謂成就せし恋を見
ること毛並よき猫を銀貨に換へて得たるが如く思ふこと能はず
予は深く花を愛す且つ花を摘取り若くは根越にして我が瓶
中或は庭中に移さんと片意地にも思ひ定めて死に至るまで思
ひ返すこと能はざる境界にあり（筆者注。以下を便宜上〔甲〕
とする）これによりて遂に惡毒物の攻撃を感じて今はしも両
頭の怪物となれり清水と汚泥と混ぜるを飲めり粟と礫と雜れ
るを咬めり苦めり怒れり愛情の頭と慾の頭と相戦ひ咬めり殆
ど逆しまに泥海に墮し永く礫を食ふの悪境に入らんとしつゝ
あり然れども予はこれを以て亦予が樂園なりと思へり嗚呼予
が現に住む樂園は蛇の群がる牢獄あり樂園は即ち牢獄なり
借問す雷音洞主足下、頓首す風流悟作者丈室下、洞主若し予
が如き頑迷不化の妄執者をも説法し得べしとなさば幸ひに予
に示せ洞主は果して情の働きによりて身を彼の樂園に投ずることを得たるか將た智の働きによれるか將た智の働きにより

て半身は樂園に住み情の働きによりて半身は今も尚ほ予と同
じく悪境には在らざるか予が葡萄菓の如き眼は洞主が身を樂
園に投ぜし心根の為に汪々と涙を流して止まざるなり

八月十五日早飯前

（原文総ルビ）

折から三昧が同紙に連載中の小説「雨の夜ばなし」の第十回に
すぐ続けて掲げられている。「其一」とあるが、以後は掲載され
なかつた。おそらくこの後見る露伴の駁撃文「虚子が言について」
の連載が翌十九日から『国会』紙上で始まったのが、その主たる
原因だろう。本論争において特に重要な意味をもつ文章であるか
ら、A・Bそれぞれについてやや仔細に検討していく。Bは露伴
の「風流悟」評であるが、これも論争全体から見て忽せにはでき
ないと思われる所以「風流悟」本文自体と対照させて見るつもり
である。

Aの部分。「虚子」が三昧の匿名であるのは既に了解済みのこ
ととして、その匿名の質が肝心なのだが、冒頭先ず「天心、露伴、
太華、簞村、三昧の諸君に誘はれて」云々とあるのに注意しよう。
天心等それこそ正しく当時の根岸党の文人達の名が五名ばかり連
ねられているが、その中に「三昧」の名もわざわざ添えられてい
るということは、「三昧」の名を純粹に客観化して文を作成してい

るということである。とすれば、少なくとも（表面的には）この文の筆記者「虚子」と作家宮崎三昧は別箇の人物として扱われていることになるわけだ。この後にも「三昧道人の『吾亡妻』」といふ表現が見えるが、無論そちらの方は一般に匿名を用いた自評の常としても格別問題は無いと言える。だが、今こここの「三昧」は問題で、このような偽装を施そうとするところ、施して貫き通さねばならないようなところに実は問題も起こつてくるのだ。

ただ、偽装といつても冒頭のように書けば、掲載紙の性格もあることではあるし、やがて根岸党に筆者が三昧であると知られぬ筈もない。又「偶筆」文全体の文調・用語等に漢学者でもあった三昧の個性が窺われなくもないのに、注意して読みさえすれば、根岸党に限らず一般の読者にも「虚子」が三昧であるらしいといふことはほぼ推察できたかも知れない。だから、「虚子」という匿名が三昧にとって絶対的効力を發揮することなど到底期待できないのだが（恐らく三昧自身そのことは意識していたろうと思われる）、一方匿名を用いたなりの効果が全く無いというわけでもないと思われる。やはり「偶筆」は、ウカとはその本文を読み流してだけで筆者＝三昧と会得されるような文章ではないということも依然としてあつたのではなかろうか。

緑雨の「荆鞭」は正にそれを「訐」（鷗外「美妙齋主人が韻文

論」）いてみせたものであるが、これとそれ以前、露伴が「虚子が言について」の中で初めから「虚子」を三昧と認めているらしいのに最後まで「虚子」で押し通して敢えて公表していないのを考え合わせると、今度は更に「虚子」の匿名のもう一つの側面、それが本来三昧と了解されて差し支えない質のものではない（頭から筆者を三昧と置いて「偶筆」本文を読むことが憚られる）という側面が明瞭に浮かび上ってくる。後に鷗外は「美妙齋主人が韻文論」冒頭で匿名について論ずるところから三昧弁護に入るのだが、匿名にまつわる問題は一筋縄ではいかない、微妙な要素を孕み持っていると言うべきだ。

続けて「吾亡妻」に関する叙述部分を見る。これによると初めて「虚子」は「未だ国民之友夏期付録を見」ていなかつたが、抱庵が「三昧道人の『吾亡妻』に就て感を書したる文を読」んで、それに触発されて「国民之友を読み『吾亡妻』より読」んだ、といふことになる。だが、それならば何故、抱庵文を読んだばかりの時点で「欣然として君の誠ある涙珠が至情の文の為に堕ちたりの時点で『喜び』などと言えるのか。つまり、どうして本文も読まぬ者が早くも「至情の文」と言い、また「欣然として」「喜び」などという感想を述べることができるのか。ここには明らかに初めて読んだとの文意に反して、既に「吾亡妻」を読んだ者の「吾亡妻」

文への評価が入り込んでいる。後に緑雨がここを咎めたのは、一つには自ら世に先んじて自らの文を「至情の文」云々と評したとの不当故にあつたが、「偶筆」本文の文脈に照らしても、この「至情の文」という一句の前後の文章はオカシイのだ。筆者の書き急ぎを、ということはとりも直さず「至情の文」という自賛的意味合いのこもつたと受けとれる文句への筆記者の強い執着をここに看取してよい。

このあと、文は雷音洞主の「風流悟」評へと移っていくが、よく見ると「吾亡妻」と「風流悟」に対する取り扱いの差が「紅色に看入りて而後に黄なり白なる者を見る時は」云々の、例の露伴・緑雨二人から指弾された、問題の修辞法の箇所以前に歴然として存することに気付く。「偶筆」本文では「吾亡妻」にのみ二重鍵括弧（『』）を用い、「風流悟」は全く括弧無しの扱いとなつている。本稿冒頭に掲げた『国民之友』夏期付録収録作品全五篇の内「空屋」と「曇天」は明らかに小説、思軒のはその名の通り雑説で、この五篇の中では「吾亡妻」に最も近似しているのは「風流悟」だ。妻を喪った悲しみを縷々述べた「吾亡妻」と、恋というものについて独白体で説き記しつつ最後恋人の死をもつて終わる「風流悟」と、ごく表面的にではあるが、他作品に比べれば近しいものがある。そんな「風流悟」が「吾亡妻」と扱いの上で差を

付けられて、（しかもこの「偶筆」文本来の趣意は「風流悟」評だ）、結局「吾亡妻」のみ二重鍵括弧を付せられたのは何故か。ここにもう既に、緑雨の所謂「語を『風流悟』の評に藉つて自ら「偶筆」とした、それだけ「吾亡妻」を持ち上げようとした「偶筆」文の眞の性格は露われ出ていると考えられる。「至情の文」云々の箇所と「紅色に看入りて」云々の箇所が、いわば「虚子」の名の下に自らの正体を包み隠したつもりの三昧の緑雨に隠まえられた尻尾とすれば、この「『吾』妻」の特別扱いは、顯れてまんまと誰にも隠まえられずにしまった尻尾と言うべきだろうか。

だが、翻つて考えるに、仔細に見てきた場合、これだけ露骨に「吾亡妻」への執着が顕われてしまうのであれば、極端な話が、不知庵主人が三昧を弁護して緑雨に語つたという「虚子の文は洒落なり咎むる勿れ」という語の、いっそ「洒落」として「虚子」という匿名もその文章「偶筆」も理解できないか、という異見も可能性として立てられよう。だが、もしもこれを「洒落」と解するならば、そのように「洒落」られた「吾亡妻」というものは一体何であったのか、という問題が尚依然として残るであろう。その場合もやはり、緑雨の指摘する通り「吾亡妻」は「偽物」となり了ると思われる。それが、たとえ、その妻の死に際会し執筆に及

んだ日から少なくともひと月以上経っている、としても事情は変わるもの。

A部分検討の最後として、例の修辞法について見る。再三言つて來ているように、この後の露伴の「虚子が言つて」で問題として取沙汰されることになる箇所で、多言を要すまい。「紅色に看入りて」以下「否々」で打ち消されるまでの一節は、どう読んでも「至情の文」と称すべき、亡妻哀悼の名文「吾亡妻」が、それ自体では本来それ程に感銘多くを与えるはずもない露伴の「風流悟」をも悲痛堪え得ざるものと化した、と読める。(但し、一言

注意しておけば、この後見るように「虚子」の「偶筆」における「風流悟」把握は、必ずしも「故人哀傷」文としてのそれではないようである。巧みな修辞が、露わに「風流悟」を貶めることなくして、尚且つ「吾亡妻」本文を遥か高く壇上に祀り上げる装置として働いているのだ。露伴の弁駁も、緑雨が「語を『風流悟』評に藉つて」云々と責めたのも、そうした「風流悟」を踏み台にしたもの同然の、匿名に隠れての自作称賛に反撥・抗議したものである。また、その「偶筆」文中、特に「否々」の二字以下が、実にうまくこの装置の蔽い役を果していることも、見逃がすべきではあるまい。

更に、先に触れた匿名の件に関連させて言えば、露伴らもとも

と三昧に身近な根岸党の人々も含めて、注意深い読者にはやがて知られるであろう匿名「虚子」の使用も、いうなれば如上の「否々」に代表される三昧独特の修辞の一環と見られなくもない。ある。名を匿すという意味ではその後無効となつたとしても、その匿名使用のあつてこそ先に示したA部分の叙述は可能になつたのであり、その内容の印象は読者の脳裡に尚残るのである。これは「否々」で前言を取り消しても、前言は前言で修辞的に残像として生きると同種の筆法と認められるからだ。

四

「偶筆」の後半、といつても実際量の上では全体の三分の二に近い量を占めるB部分では、ようやく「吾亡妻」を離れて、雷音洞主露伴の作「風流悟」に対する評が語られる。

「風流悟」は、「恋と名のついたものは即ち牢獄なるか」で始まる、露伴の一種の理想的な恋愛観(恋愛至上主義)を表明した文章である。透谷に影響を与えて後に「我牢獄」のような作品を書かせた事はよく知られている。三昧の評は、特に「風流悟」の後半部分の露伴の「恋」に対する見解に異議を唱えたものと見なせるが、先ずはその「風流悟」のあらましを確認しておくとしよう。

露伴は冒頭で次のように説く。

恋と名のついたものは即ち牢獄なるか、我はそれを牢獄なりと敢て断定するにはあらざれど、恋の範囲内に入りしものは皆必ず自由を奪はるれば恋を牢獄といふも或は当然なる

さて、その「牢獄」であるところの「恋」に自分は捕われてしまつたわけだが、自分は「我が身」の存するゆえに「夢の化石世界」つまり「位階、爵禄、門閥、容貌、言語、衣服、金錢等」に代表される現実世界において「最もあさましき身」(最劣者)であり、彼女は「最も輝ける」存在であつて、その懸隔は大きい。もちろん自分は「彼女の有せる如き夢の化石」故に彼女を愛すると

いうようなさもしい了簡ではなく、「たゞ彼女を愛するのみ」なのだが、強いて「此恋の起因」を求めれば「彼女が胸中に有せる無価の宝壺より溢るゝ至妙の香氣に撲たれ」たからと言う外ない。もともと自分は「僻める性」「四角より三角の形を有せる心のもの」であつて、一方の彼女はそれと全く反対の「柔順なる性」「円陀々たる形を有せる心のもの」であるのだ。

さて「血、汗、涙の世界」の住人の自分が「善、美、大の世界」の彼女に曲りなりにも愛されたと実感した時、「野獣の我は少しく野性を脱」し、その「恋」「愛」ゆえに「心」も「眼」も前と全く

変わり果せたのだが、この「恋」の「牢獄」は「天の帝」の与えたものかもしだらず、一般的の牢獄と異なり「悪の報ひとして存せらるゝ惡の箭を防ぐの鉄壁」「淨玻璃の絶縁者インシュレーテルとして存」する。平時、人は誰でも巧みな「言語」や「詐偽、暴力、妖術、毒薬等」を使うものだが、自分はそれらに満ちた「俗世界より引き出だされて恋と名のついた牢獄に投ぜられた」のである。だが、それならば一体どのようにして「胸中の真情を吐露」したらよいのか。この辺から「恋の成就」ということが問題となつてくる。三昧の「偶筆」文後半の「風流悟」評が直接かかわつてくるのもこの前後からである。

「私は卿を恋へりといふ一語」を彼女に向けて言い放つこと自体は「口吃せる」自分といえど簡単である。問題は、そのあと「彼女が果して如何なる語をもつて如何なる情をもつて我を待つべきか」の一点にあり、それによって「世に所謂不成就」と「世に所謂恋慕の完結」は分たれるのである。ところが「夢の化石世界」の「最劣者」と「最勝者」とでは間に存する「障礙物」はあまりに大きく、これだけでも「不成就の傾き」があるといえるのに、またもし恋を語らずにしまえばこれは「彼女にも人にも知られず畢るべき故確に不成就」となる。「不幸の恋に沈」んで悲しみ恨み歎いたその挙句は「我」を「恋慕」を「運命」を厭い憎むよう

になってしまった。（以下の引用部分を「乙」とする。）

人若し恋の牢獄に入りて苦惱を感じば恐らくは我が感ぜしこときものに過ぎざらむ、唯幸にして恋慕の念の深からむには怖るべき不幸には沈まざるべきも、愛の情の弱くして彼のインシユレートルの破碎し易く彼の鉄壁の脆き時は悪毒の物の攻撃を感じて自ら両頭の怪物となり恋と我慾の離れざる想に沈み清水と淤泥の混ぜるものを飲み粟と礫と雜れるものを噛み、漸く苦しみ漸く怒り遂には転じて自己が愛情の一頭と我慾の一頭と相戦ひ相咬み、我慾の一頭勝つが否や逆しまに泥海に墮し永く礫を食ふの悪境に入るものなり、私は悲みし泣きし恨みし歎せし、然れども我慾の念をば幸に折伏したりしが故に左る悪境には入らざりし。（傍点引用者）

この部分は、後に「偶筆」文の対応箇所「甲」と照らし合わせてみようと思う。「偶筆」文でまとめて取り上げられ、その内容についていちいち裏返しの筆法を以て述べられた箇所だからである。さて「世の所謂恋の成就」について思考した自分は、それが「情の働き」とは別の「多少の智恵の働き及び強き意の働き」の所産に過ぎないと知る。だから世間的な恋の成就により、「佳人を得て妻となす」のはいわば「毛並よき猫」を「幾枚かの銀貨」で買い取るのと同じことで、「俗に所謂恋の成就は形象的

開明の皮を有せる掠奪婚姻の成就のみ」という結論に至る。かつてそれを望んだ自分は「我意を花に加へて花の真を強ひ瓶中或は庭中に移さんと企てるのに似て、純粹さと深さとを欠いていたが、今やようやく「俗に所謂恋の不成就の境界に幸福にも在」つたことを喜んで「一直線に真の恋の成就の方に走り行」くのだった。

では「真の恋の成就」とは何か、自らの「唯一の恋慕の念の彼女に感得せられて、而して彼女の我に対して又唯一の恋慕の念を発せる時」をいうと著者は述べる。「さる時は無形的に我と彼女とが夫妻たるべきのみならず具象的にも夫妻たるべきなり」となるのだが、それは随分ロマンチック且つ理想的な、いつそ神秘的ですらある恋愛観と言わなくてはならない。こうした「恋慕の成就」であってみれば、到底実現が困難に思われるのだが、しかし、遂にその「恋」は実現した、悲しむらくは「彼女」の亡せゆく正にその時において。「風流悟」にもし悲劇的性格を認めるなら、その悲劇性は先ずこの点に求められるべきではあるまいか。

「彼女」が実在の女性かどうか不明であることや「風流悟」全篇の趣旨があくまでその恋愛観の開陳に存することを踏まえた上で、悲劇性を云々するならやはりそうなると思う。そうすると、最初から亡妻哀悼の辞を書き連ねた「吾亡妻」の悲劇性と、掛け替え

の無い女性を失った悲しみという一点でかすかに共通性が見いだせなくもないのだが、「偶筆」で三昧が「風流悟は何ぞ其れ悲しきや」と感想を述べたのはどうもこの箇所に関してとは受け取れないことも予め注意しておく。

最後は「牢獄」即「樂園」の心境を次のように記して終わる。

私は（中略）世人が見て成らずとなせるところの恋をなしたり、今も尚ほ恋の牢獄の裏にあつて生活せり、此牢獄と名のついたものは即ち常に、今も存せる彼女と我とが手を携へて逍遙するところの樂園なり、牢獄は即ち樂園なり、蛇の居らざる樂園なり

以上が、「風流悟」のあらましである。

象を禁じ得ない。

虚子の「偶筆」文（B部分）と「風流悟」の対照だが、おおかた「風流悟」に盛られた露伴の所説を、現実的な立場に立って否定し覆そうとしたものと見ることができる。「頑迷不化の妄執者」と自ら称している如く、露伴のように「恋」に向かいひとつのみ「悟」りをもつて対すること能わざる、「風流」ならぬ、いわば「俗」（または「我慾」）の境地を反証として提示していると見られるのである。

だが、改めて考えるに、これを「吾亡妻」の著者宮崎三昧の境

地とすると、少しく不穏と言ふことができまいか。「偶筆」文本に照らして見る限り、その「恋」や「愛情」はどうしても亡き妻をいとおしむ心を意味するとは読み取れない。否、読み取り難いのである。それより遙かに生々しく艶っぽい、かつ露伴の述べているような純粋なプラトニックな恋愛感情よりよほど俗な恋情を想わせるのだ。そして、こうした受け取り方が当っているとしたら、何よりも最愛の妻を亡くし、哀悼の文を綴り、発表し、まだそう日の経たない内にこうした恋情表白の文を草するというのは一体どうしたことか。単なる「悟」りすまんとした露伴への反命題を提示しようとしただけともそれなくはないが、それならそれでその必要がどこにあったのか、どちらにしろ、不透明の印象を禁じ得ない。

それにしても「風流悟」の説に個人的に異議を唱えているらしいのはすぐと理解されるのだが、それでは「虚子」こと三昧自身の恋愛に関する所説というのはどのようなものかと言えば、それが実はあまり判然しない。「風流悟」の字句を引っ張ってきては否定の辞を連ねるという風に進めているだけだからであろうが、その中でも唯一箇所「虚子」の個性が「偶筆」文に看取されそうな所がある。「風流悟」の〔乙〕部分に対照される、「偶筆」の〔甲〕部分である。

もともと「偶筆」では必ずしも「風流悟」の所説を、その順のままに引いてきているわけではない。かなり恣意的に位置の組み換えが行われている。(「風流悟」のあらましとして先に示したところは、適宜省略した箇所もあるが、ほぼ「風流悟」本文の叙述の順に従っているので、それと比較すれば「偶筆」がどのように叙述上の改変を行っているか理解されるはずである)同時に、しかし、字句引用はかなり「風流悟」本文に忠実で〔甲〕部分以前では一三の異同箇所を見るのみである。但し、その異同も内容的に重要な意味を持つものとは認められない。そして、内容に関すると思われる異同箇所を有するのが、実にその〔甲〕と〔乙〕の部分なのである。先に「風流悟」を紹介する過程で私に傍点を付した〔乙〕部分を見れば、何が「偶筆」文で削られたか、これも明らかであろう。

先ず〔乙〕部分で露伴が主張しているのは、人は誰でも「恋」に陥ればそれなりの「苦悩」を味わうが「幸にして恋慕の念の深い時には「怖るべき不幸には沈ま」ない。反対に「愛の情の弱い時には「悪境に入る」こととなるということ、そして露伴自身は純粹な「愛情」の発展の妨げとなる「我慾の念をば幸に拆伏」したため、救われたということである。「虚子」がこの〔乙〕部分を「偶筆」で〔甲〕部分のようにことごとに否定の辞を連ねる

ことによって「悪境に入らんとしつゝあ」る自分を認めたということは、取りも直さず「虚子」が「愛の情の弱」かったことの表白に他ならない。と同時に「恋と我慾の離れ」ずして遂に「我慾の一頭」が「愛情の一頭」に勝つことの自己表白に他ならないのだ。一体、「風流悟」の字句をほぼ忠実に引いてきつつ、否定の辞を重ねていくことによつて評を下さんとした「虚子」が、ことこの「我慾」の二字に限つて毛嫌いしている風なのは何故なのか。一見、確かに削られ隠されているにも拘わらず「風流悟」本文と照らし合わせる限り鮮明に浮かび上つてくるはずの「我慾」の二字もまた「偶筆」A部分に見られたと同じ、「虚子」こと三昧の尻尾ではないのだろうか。しかして、緑雨がその「荆鞭」で三昧を批判・攻撃するにあたつて指摘した「おのれの名を衒はんとするいやしき心根」とは、言葉を換えれば、正にこの「我慾」ということになるのである。

B部分の末一段を最後に見ることにする。「智の働き」「情の働き」は「風流悟」概観の際にも引用して示した如く、これも露伴の語をそのまま持つてきたものであることは明らかだが、露伴文にあつては「情」即ち「恋慕」であつて、それと対立すべきものとして「意(欲)」や「智(恵)」が語られている。そして、「眞の恋の成就」に「意欲の働き」「智(恵)の働き」が妨げとなること

は明白であった。それに対しての三昧のここでの「洞主は果して」

云々の言は、ただ言葉を転がしているだけで、全くの無効・無意味であるとしか思われない。

ところで、B部分文末における最大の問題は、一番最後の「予が葡萄菓の如き眼は洞主が身を樂園に投ぜし心根の為に汪々と涙を流して止まさるなり」という一文にある。^{注6} この「汪々涙を流して」云々は、A部分の末段にあつた「風流悟は何ぞ其れ悲しきや」「云々という文句と照應していると見てよいであろう。その際に「吾亡妻」を持ち出し、間、髪を入れず「否々別におのづから予が中懷に根触する所のものあればなり」と一応「吾亡妻」紅化説？を打ち消すという述べ方をしていたのであった。だが、このB部分最後で「汪々と涙を流」す理由は「洞主が身を樂園に投ぜし心根の為」ということになっており、それは言い換えれば、露伴の言う如き「真の恋の成就」を遂げて「樂園」に入ることのできない、「俗」と「我慾」に囚われた己が身が悲しいということになるのだろうが（別に、露伴を哀れんで悲しむ、ともとれなくはない）これまた不明瞭な言い回しだが、その前の部分との関係により、上の如く解するのがより適当か）、もしそうだとするならば、その「悲しみ」は、当然A部分末尾近くで「風流悟は何ぞ其れ悲しきや」という、その「悲しみ」でもある（あるいは、にも繋が

る）はずである。

それならば、明らかに「偶筆」筆記者の「風流悟」に對して抱かれた「悲しみ」と、「吾亡妻」に対する「悲しみ」（こちらは言うまでもなく、愛妻との死別という悲しみである）とは、その質・内容を異にすると言えるのではないか。そんな全く異質の悲しみが、どうして同じ一つの「悲しみ」に括られ、前後の影響関係など云々され得るのか。不可解と言うしかなく、ここにもA部分末段の一節の、叙述の取つて付けたような不自然さが露わっていると言つうことができよう。（例えば「風流悟」の、特に結末部分の「真の恋の成就」と同時に当の「恋人」に死が見舞つたという件を強調して受け取り、そうした愛する人との死別という線で、その「悲しみ」が多分に「吾亡妻」のそれに影響されたのではないか、と疑うのなら筋としては通るのである。だが、既に見てきたように「偶筆」の全体を首尾一貫したものとして読む限り「偶筆」筆記者の「風流悟」に對して認める「悲しみ」を素直に愛人との死別の「悲しみ」とは言い得ないだろう。）

いざれにしても、三昧が「虚子」なる匿名で著わした「偶筆」は問題の多い文章なのであった。

注

意気込みとの関連を想定していいだろう。

1 実際の掲載順序は「曇天」と「空屋」が逆になっている。尚、

西邱隱者は宮崎湖處子。

2 また文中「予が齡今茲三十」とあるが、三昧は安政六年（一八五九）八月一日生まれだから明治二十四年（一八九一）の七月「吾亡妻」を執筆したとすると計算が合わなくなることを指摘しておく。

3 吉田香雨の「當世作者評判記」（明治二十四年一月刊）の「三昧道人」の項には

5 文中、「葡萄菓の如き眼」という語は、雷音洞主として著わした露伴自身の「風流悟」広告文である。

6 文中、「葡萄菓の如き眼」という語は、雷音洞主として著わした此篇を読み了つて能く真趣を解し得む者は日本國裏唯三人ならむ其一人は作者自身なり他の二人は葡萄の如き眼をもつて読まさる人なり

云々と記されてあるが、実際そのように未だ小説家として際立った作物をなしていなかつたことと、この「吾亡妻」に賭ける見ず

4 緑雨「荆鞭」等によって、やはり「吾亡妻」への逸早い好意的な評として須藤南翠のものがあつたことが知られるのだが、その掲載紙「改進新聞」はこの八月十五日から九月三日まで欠号で、現在のところ未見である。

4 緑雨「荆鞭」等によって、やはり「吾亡妻」への逸早い好意的な評として須藤南翠のものがあつたことが知られるのだが、その掲載紙「改進新聞」はこの八月十五日から九月三日まで欠号で、現在のところ未見である。